―本号掲載の論文要旨―

お伽草子『ちごいま』の柏木物語受容

鹿谷祐子

お伽草子『ちごいま』には、『とりかへばや物語』や『秋の夜の長物語』をはじめとして、さまざまな先行物語からの影響が見られる。だが、『ちごいま』に最も大きな影響を与えたのは『源氏物語』である。主人公である稚児と内大臣家の姫君の恋愛は、柏木と女三宮の物語をなぞるように展開しており、語句レベルに留まらず、登場人物像や物語の展開に深くかかわる引用の様相を見ることができる。

本稿は、柏木物語の受容と離脱を通して、『ちごいま』を『源氏物語』享受史の中に位置づけようとする試みである。

『好色五人女』樽屋おせんをめぐる巷説について

堅田陽子

『好色五人女』巻二に描かれた樽屋おせんの密通事件を伝える歌祭文に、「樽屋おせん」と「〈長右衛門よざかり〉おせんいせさんぐう」がある。これらを、おせん事件にかかわる諸資料と対照し、当時の巷説を推測した。生真面目な女というおせんの人物像の背景に『世継曽我』の登場人物である大磯の虎の俤があったこと、そうした人物像にほぼ並行して好色者としてのおせん像が流布していたことをふまえ、巻二の文脈や構成にある問題について言及する。

「厚化粧」の田村俊子

―つくる／つくられる女作者―

王　勝群

今日では、女性作家田村俊子は再読・再評価されつつも、いまだに全盛期の作品のヒロインと同一視される傾向が残存し、「厚化粧」のイメージと固く結び付けられている。

本稿は〈化粧〉というキーワードに着眼し、俊子の代表作『女作者』に注目した。先ず全盛時代の俊子の言説・行動およびそれが同時代の文脈における意味を考察し、その創作と化粧との隠喩的対応関係がいかに築き上げられたかを考察した。そして、『あきらめ』との比較を通して、『女作者』における〈化粧〉の意味を分析した。最終的に、俊子が〈化粧〉を通して、女性性と書くこととの人為的な関係性を転覆させる可能性を明らかにした。

書き換えられる〈父〉

―森茉莉『甘い蜜の部屋』と「しんかき」―

西原志保

森茉莉『甘い蜜の部屋』における書物や文字の描写を整理したうえで、主人公モイラの芳香を喩える植物の比喩に用いられる「しんかき」に注目し、「父の言葉」の機能を考察した。「しんかき」は父が用いた筆である。考察の結果、以下のように結論づけた。『甘い蜜の部屋』における「父の言葉」はロゴスではなく、書き間違いを消す機能である。『甘い蜜の部屋』を書く行為は、書き間違った現実を消し去り、書き直す試みであった。

豊島与志雄と中国

―ある汎アジア主義的な心情を中心に―

張　鈴

小論は、戦後の日中友好運動の先駆者である豊島与志雄の中国的要素を取り入れた小説を考察し、豊島が抱く汎アジア主義的な心情を、戦争責任の問題を踏まえて再評価した。一九四〇年前後、豊島は漠然とした期待があった。戦争末期、豊島は個人の理想が国家の政策と合致するようになり、軍の政策に賛意を示した。戦後に書かれた小説は豊島の戦争責任の自覚の乏しさを露呈したが、同時に、豊島は同じ小説において日中のはざまで生きる理想的な人間像を提案し、日中友好運動に寄与した。